

コロナ禍での研究を振り返って

安達大輔

新型コロナウイルス感染症拡大の影響は2020年2月末頃に深刻なものとなり始め、2月19日に中村唯史教授のお力添えをいただいて公開フォーラム「ロシア亡命文学を考える」を京都大学で開催したのを最後に、関わりのある学術関連の催しが続々と中止され、海外渡航も不可能になった。本稿では、このいわゆる「コロナ禍」が収束しつつあると思われる2023年6月の時点からこの間の研究状況を資料調査と成果発表・研究交流の二点から振り返る。この歴史的な事態を記録に残すととともに、そこで浮き上がってきた課題についても問題提起を行ってみたい。

(1) 資料調査

2019年度は科研費基盤研究(B)の助成を受けて「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマの想像力の総合的研究」をテーマに共同研究をスタートさせたばかりであり、いきなり研究体制の再構築という大きな課題に直面することになった。海外での資料収集ができない苦境は長引き、コロナ禍がようやく落ち着いたと思われた2022年2月にはロシアによるウクライナ侵攻が起これ、ロシア・ウクライナでの調査が再び困難になってしまった。科研グループ全体の対応としては、まずコロナ禍以前からメンバー間で行っていた基礎的な文献情報やデジタル化した資料の共有をインターネット上の共有フォルダ(Dropboxや北海道大学が契約するGoogle Drive)で進めていった。その後もデジタル資料を積極的に利用したり¹、予定していた旅費を図書費に宛てて集中的な図書構築を図るなど影響を最小限に抑えて着実な研究ができるように工夫した。それでも演劇やバレエといった舞台芸術の上演ができない状況は、上演に関わる側だけではなく研究者にとっても重大な影響があり、研究方法の再考を迫るものであったようだ²。

個人としては、19世紀ロシアのメロドラマを研究テーマとしているが、とくに19世紀前半はピクセレール、デュカンジュ、デンヌリらによるフランスの代表的なメロドラマがロシアでどのように受容されたかを研究することが鍵となる。インターネットを利用することでロシア語による翻訳・翻案を参照することができただけでなく、フランス語原作と比較することも可能になった。また Полевой や Хомяков の知られざる作品から始まって

¹ インターネット上で無料で利用できる資料だけではなく、アマゾンのKindleなど有料のものも含む。コロナ禍とは別の問題だが、近年では紙媒体の蔵書の収納に頭を悩ませる研究者や組織も多く、省スペースの観点からもデジタル資料の活用を進めた。

² この間のロシア演劇の状況については、科研メンバーである伊藤倫講師(明治大学)による「ロシア(主にモスクワ市とペテルブルグ市)の場合」『早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点(令和2年度)特別テーマ研究2「COVID-19影響下の舞台芸術と文化政策：欧米圏の場合」報告書』、2021年、19-20頁(2023年6月21日現在PDF版オンラインで閲覧可能)を参照していただきたい。

Кукольник, Потехин, Шпажинскийら、当時は人気があったものの現在ではほぼ忘れられている、あるいは研究が進んでいない作者の手になるメロドラマや、メロドラマの隣接ジャンルであるヴォードヴィル作品の収集をすることもでき、19世紀ロシアにおけるメロドラマの歴史をたどる上で大きな成果があった。

当時刊行された作品や新聞・雑誌での批評記事に関しては、モスクワ・ペテルブルクの両国立図書館³、プーシキンスキー・ドーム⁴、エリツィン記念大統領図書館⁵、モスクワ・ネクラソフ図書館の運営による Электронекрасовка⁶等のサイトでスキャンされた原本を閲覧できるほか、GoogleによってPDF化されているものもある。また Lib.Ru⁸や ImWerden⁹、ФЭБ¹⁰といったサイトでも著作の初版や再版を電子化された形で閲覧できた。

この時代の定期刊行物はデジタル化が進んでいる。モスクワの歴史図書館のサイトにはインターネット上で閲覧できる新聞・雑誌のリンク集¹¹がある。ペテルブルクの上記シチェドリン図書館のサイトは新聞をリストにしている¹²、例えば Северная пчела をPDFで気軽に閲覧できる(日本国内では北海道大学図書館にマイクロフィッシュが所蔵されている)。舞台芸術に関してはペテルブルクの演劇図書館のサイト¹³が充実しており、当時の演劇雑誌を参照することができた。

以上がすべて無料でアクセス可能なのに対し Brill社の提供するオンライン一次資料アーカイブは有料であるものの、Slavic and Eurasian Studiesのコーナー¹⁴は充実しており、大衆文化時代のメロドラマを研究するために欠かせないコレクション¹⁵を含んでいる。

また国内外の資料の取り寄せの際にはスラブ・ユーラシア研究センター情報資料部の兎

³ <https://www.rsl.ru/> (なおレーニン図書館は、デジタル化された文書を横断的に検索できるポータルサイト Национальная электронная библиотека (НЭБ) <https://rusneb.ru/>の運営も担当している。)

⁴ <https://nlr.ru/>

⁵ <http://lib.pushkinskiydom.ru/> (有名な『18世紀』シリーズなど研究書や事典等も充実した総合力の高いサイトとなっている。)

⁶ <https://www.prlib.ru/>

⁷ <https://electro.nekrasovka.ru/> (このサイトについて東京大学の古宮路子助教にご教示いただいたことを記して感謝いたします。)

⁸ <http://lib.ru/> (現在ではマイナーとなった作家の作品も読めるので重宝する。)

⁹ <http://imwerden.de/> (研究書も含め各種の著作がそろっている。)

¹⁰ <http://feb-web.ru/> (有名作家の著作集のほか、古典的な研究や事典類も充実している。18世紀研究に欠かすことができない『18世紀ロシア語辞典 Словарь русского языка XVIII века』も検索可能で、2023年6月現在までに刊行されている22巻のうち19巻(Пенат — Плангерд)まで掲載されている。)

¹¹ https://www.shpl.ru/readers/helpful_links/internet-resursy_po_periodicheskoi_pechati/

¹² https://nlr.ru/res/inv/ukazat55/structure_full.php

¹³ <http://sptl.spb.ru/>

¹⁴ <https://primarysources.brillonline.com/subject/Slavic%20and%20Eurasian%20Studies>

¹⁵ 一例をあげると、The Yearbook of the Imperial Theaters Online, Russian Theater in the Early 20th Century Online, Screen and Stage Online, Early Russian Cinema Online, Soviet Cinema Online, Imperial Russia's Illustrated Press Online, Mass Media in Russia Online, Popular Literature, Fiction and Songs in Imperial Russia Online 等。

内勇津流准教授が親切にサポートしてくださり、こうした非常事態では大変ありがたいものであった。この場を借りて御礼申し上げたい。

このように図書館資料と手持ちの蔵書、インターネットや取り寄せ資料をやり繰りする事で研究課題を遂行できたものの、デジタル化されていないものや日本では入手できない資料も多く、現地調査ができないことの損失は、フィールドワークを専門としていない研究者でもやはり大きいことを改めて実感することになった。もし今後もロシアとウクライナでの資料調査が難しい状況が続くようであれば、両国以外の旧ソ連諸国や、帝政期の資料が充実していることで知られるフィンランド¹⁶、ロシア・ソ連文化研究が盛んなアメリカ¹⁷での資料調査のルートを確認して情報共有することを検討する必要があるのではないだろうか。

(2) 成果発表と研究交流（研究会・セミナー・シンポジウム等）

上述のように、感染症拡大の状況が深刻になった当初は研究会やセミナーの中止が相次いだ。科研に関しては、2020年3月にスラブ・ユーラシア研究センターで予定していた年度末の研究報告及び打ち合わせ会が中止になったほか、4月に参加を予定していた BASEES（ケンブリッジ大学）及び St Andrews 大学での関連セミナー、5月にスラブ・ユーラシア研究センターで予定していた公開講座「メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」、8月にモントリオールで開催予定だった ICCEES がすべて中止となった。

このような状況への対応が模索されるなか、次第に国内外で Zoom による研究会やセミナーが定着してゆく。上記のイベントもいったん延期の末、期間をおいてオンラインで開催されることになった¹⁸。スラブ・ユーラシア研究センターは比較的スムーズにこの事態に適応し、毎年恒例の国際シンポジウムをこの年も中止することなく、夏にはすでに完全オンライ

¹⁶ フィンランドの図書館でのロシア語資料調査の最新かつ詳細な紹介は、豊川浩一「フィンランドの図書館事情：国立図書館を中心に」『図書の譜：明治大学図書館紀要』27号（2023年）、75-80頁。バルト三国の図書館を含む紹介として、堤正典「フィンランド・バルト三国図書館訪問記」『神奈川大学言語研究センターNEWS LETTER』No. 45、2020年、1-4頁。ヘルシンキ大学アレクサンテリ研究所（ロシア・東欧研究所）との交流については、田畑伸一郎「ヘルシンキにおける「ロシア近代化」ワークショップ参加記」『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』135号（2013年11月）、14-15頁。以下の大矢温教授、岩崎理恵氏によるそれぞれおよそ20年、10年前の図書館滞在記を含め、ここであげた文献はすべて2023年6月21日現在インターネットで閲覧可能。<http://web.sapporo-u.ac.jp/~oyao/fin/fin.htm>;

<http://www.tufs.ac.jp/ofias/j/tankihaken-eu/events/20118.html>

¹⁷ とくにイリノイ州立大学アーバナ・シャンペーン校の図書館は、資料調査をサポートする Slavic Reference Service を備え、毎年夏には Research Laboratory を開催して滞在する研究者同士の交流もうながすなど、資料の質量と調査のしやすさで評価が高い。

¹⁸ 科研をもとにしたスラブ・ユーラシア研究センターでの公開講座「メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」は2021年度にオンラインで開催することになったが、この経緯については以下で紹介した（いずれも2023年6月21日現在PDF版をオンラインで閲覧可能）。『北大時報』2021年11月号（No.812）、36頁；『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』163号（2021年11月）、4-5頁。

ンでの開催にこぎつけている。この要因としては、

- ① 初期の試行錯誤を経て北海道大学から時間無制限・参加人数300人のZoomアカウントが教員に割り当てられ、会議や学術イベントで自由に使用することができた。
- ② 機材をそろえたり大人数の講演会向けのZoomウェビナーアカウントを購入するなど、コロナ禍によって発生した余剰予算を活用してオンライン向けの環境を整えた。
- ③ オンラインの催しを重ねながらスタッフ・事務が組織運営の経験と知識を蓄えることができた。
などが指摘できる。

オンライン化は研究交流のありかたに大きな変化をもたらした。PC画面上での交流では空き時間にすたわいもない会話や懇親会を含む多様なコミュニケーションのありかたが制限されてしまうし、画面を長時間見つめることによる疲れとか、逆に「ながら」視聴が可能のために集中しにくいことや、話し手に対する参加者の反応が（カメラオフの場合とくに）見えにくい等の問題点はすでに指摘されている。ただデメリットだけではない。海外渡航や招への費用はかからないし（航空券代の高騰、円安や日本経済の状況を考えると看過できない要素だろう）、ミーティングをすることもはるかに容易になった。海外研究者に講演や報告を依頼するハードルが下がり、英語・ロシア語による国際的な催しはコロナ禍以前に比べてむしろ開催しやすくなっている。研究打ち合わせや学会パネルの組織¹⁹、雑誌・論集の編集からプロジェクトや学会の組織運営²⁰に至るまで、国内外の学術交流のルートは飛躍的に増加した。また札幌という立地ゆえ、研究会やセミナーを開催しても首都圏や関西に集中している国内研究者の参加が難しいという地理的ハンディがあるが、オンライン化以降は全国から多様な専門・所属の研究者に参加していただけるようになった。このように国内外の研究ネットワークづくりの可能性は広がっている。

一方で、2022年の春ごろから入国制限の緩和が進み、時々刻々と変化する情勢に機敏に対応するスラブ・ユーラシア研究センターの研究・事務スタッフの懸命の努力もあり、海外渡航や海外研究者の受け入れが再開され始める。感染症拡大防止の観点からの政府による入国制限により、センターの外国人招へい教員制度（FVFP）では2020年度に採用者4名全員が滞在中止、2021年度は4名中実際に滞在できたのは1名のみとなっていた²¹。しかしこの時期以降、センターに滞在するFVFP教員との交流や2022年8月のメロドラマをテーマとする夏期国際シンポジウムの主催（ハイブリッド方式）、ウクライナ侵攻一周年にあたる

¹⁹ 2021年にオンラインで開催された ICCESS では科研をもとにメロドラマをテーマにした4パネルを組織したが、海外研究者とZoomで打ち合わせを重ねたことで共同研究を効果的に進めることができた。

²⁰ 2024年にダラム大学で立ち上げが予定されている19世紀研究の国際学会 INCSA (International Nineteenth-Century Studies Association) やその姉妹団体である研究ネットワーク CNCISI (Centre for Nineteenth-Century Studies International) の運営にZoomで参画した。ほかにも日本ロシア文学会事務局の運営はZoomなしでは考えられないものだった。

²¹ 国際シンポジウムにオンラインで参加・報告していただくなど、滞在中がキャンセルとなった海外研究者との研究交流を続ける努力や工夫はなされていた。

2023年2月の国際シンポジウムへのウクライナ研究者の招へい、同3月の世界的映画研究者ブルガーコワ教授の招へいやヴェネツィアでロシア文化の受容をテーマに開催された国際シンポジウムへの参加等を通じて、やはり対面での交流の重要性を実感することになった。

また一般向けの講演会や公開講座ではオンライン化をきっかけに聴衆の構成が大きく変わり、地元で高齢の、それまで「常連」だった一般の方の姿が見られなくなる現象も起きていた。インターネットやZoomに慣れていない方にも参加しやすい環境を整えて地域交流や地元密着を進めることが課題となっていたが、感染症拡大の状況が落ち着くとともに対面を取り入れたいいわゆるハイブリッド方式の導入により、遠のいていた足も徐々に戻ってきている印象を受けている。

より専門的な学術イベントでも今後ハイブリッド方式が普及していくように思われるが、多様な研究交流が可能になる半面、実質的に二種類の「会場」を設けることになるため設備・運営面での負担は大きい。講演者は対面会場とオンラインのオーディエンスに同時に向き合うことになり、注意をどちらに向ければよいか戸惑うかもしれないし、対面並みの質疑応答の環境（音声入力、会場カメラ等）を技術的にオンラインで実現することが可能なのか、そもそも必要なのか等、事前にチェックすべき点も多い。このような理由で大規模学会では難しいのではないかという声も聞こえてくる。

以上のようにコロナ禍をきっかけとして、資料調査、成果発表・研究交流のいずれにおいても、これまでの現地+対面に加え、リモート+オンラインが重要な選択肢となってきた。ポストコロナ期（ポストウクライナ侵攻でもある）は、双方のメリット・デメリットを冷静に、また状況に応じて鋭敏に判断しながら、より良い「ハイブリッド方式」の研究を模索する時期になるのかもしれない。

日本18世紀ロシア研究会 2022年度総会・研究発表会プログラム

日時：2022年9月23日（金）13時30分～17時30分

会場：明治大学・研究棟・4階・第1会議室

（対面とオンラインの併用）

プログラム

13:30～13:40 開会の辞

13:40～17:00 研究発表会

13:40～14:30 池本今日子

「スモーリヌイ聖堂の玉葱屋根—エリザヴェータ帝と教会」(仮題)

14:30～15:20 金沢友緒

「18世紀後半ロシアにおけるヨーロッパの啓蒙史へのひとつの視点」

休憩

15:40～16:30 豊川浩一

「プガチョーフ叛乱前夜の国家と社会」

16:30～17:10 会員による意見交換・近況報告

17:10～17:30 総会

17:30～18:30 懇親会(有志による参加のみ)

日本 18 世紀ロシア研究会年報

第 20 号

目次

[論文]

- スモールヌイ大聖堂の玉葱頭—エリザヴェータ・バロックと伝統
..... 池本今日子 1
- 18世紀後半ロシアに見るヨーロッパ啓蒙史への一視点
..... 金沢友緒 18

[近況報告]

- ピョートル大帝と『東北鞭撻』
..... 土肥恒之 38
- 2つの場所にあるエカチェリーナ二世像の運命をめぐって
..... 中神美砂 44
- コロナ禍での研究を振り返って
..... 安達大輔 50
- 2022年度研究会プログラム 55
- 編集後記 56